

【2013年6月29日 大会長挨拶】

第30回大会が挑む2つの構想 —災害ソーシャルワークとコア・カリキュラム—

白川 充
(仙台白百合女子大学)

はじめに

おはようございます。第30回大会の大会長を務めます仙台白百合女子大学の白川と申します。30分ぐらいの時間を頂戴していますので、大会長挨拶として3つのこととお話させていただきます。お手元に、今から使いますパワーポイントのスライド原稿がありますので、正面のスクリーンが見づらいときは、そちらをご覧ください。

まず、先ほど川廷先生もおっしゃっていましたが、第30回大会を東北で開催することの意義について考えてみます。それから2つ目に、大会テーマと基調講演に関してお話をさせていただきます。そして3つ目に、第30回大会の2つのシンポジウムについて、大会長としての期待を述べたいと思います。

1. 東北・仙台における第30回大会開催の意義

本学のような小さな大学が全国大会規模の学会をやることに関しては、大変荷が重く、正直なところ、私は何度も辞退しました。ただ、東日本大震災の被災地である東北で学会を開催したいという学会理事会の強い意向がありましたので、ならばできる範囲でお引き受けするという事で今回の運びとなりました。学会担当理事である平塚先生、高橋先生を始め、多くの先生方がご協力くださいました。また、本学の教職員と学生の協力もあり、今大会の準備ができたことを、心より感謝しております。

このあと石巻専修大学の坂田学長に基調講演を

お願いしておりますので、私のほうからは簡単にしか触れませんが、我々は現在、東日本大震災からの復興途上にあります。復興庁のデータによれば、死亡・行方不明は確か1万9,000人余、2万人弱だったと思います。現在の被災者数は、約30万人ということで、いまだに多くの方が厳しい生活を送っております。また、昨今、仙台市内や東北地方では、震災関連のいろいろな情報が流れてまいります。例えば当初予想したようにDVが多発しているとか、アルコール依存症が増えているとか……。また仮設住宅でも厳しい状況があるということが伝わってまいります。

震災から今日に至るまでのこのような状況を踏まえ、今大会のテーマは、お手元の資料にありますように「災害ソーシャルワークの構想—実践の理論化に向けて—」ということになりました。そしてこの大会テーマに則した2つのプログラムとして、基調講演と午後の学会企画シンポジウムがあります。このような企画は日本ソーシャルワーク学会として、災害ソーシャルワークの構想への取り組む決意の表れであり、その一環です。

被災地仙台で、日本ソーシャルワーク学会がこのようなテーマで学会を行う。そのテーマが災害ソーシャルワークの構想と銘打つ以上は、やはりそれなりの内容を私たちも期待したいと思えますし、なんとかそういう期待に応えられるように、大会主催側として準備を進めてまいりました。

この東北・仙台における第30回大会開催の意義は、「災害」に対してだけでなく、災害が生み出す諸問題に対応するソーシャルワークはどうあるべきなのかということ、日本ソーシャルワーク

学会として構想する出発点にしようという思いが込められている点にあります。ですから、先ほども申し上げましたように、災害ソーシャルワークの構想は今回で終わるではなくて、ここから何回かにわたってこのテーマに挑んでいく、その出発点として、仙台での学会があると受けとめております。これが私たち大会校の覚悟であり、この学会を引き受けた私たちの意志です。

2. 大会テーマと基調講演

2つ目の話に移ります。それは大会テーマと基調講演に関するものです。大会テーマは先ほど申し上げた通りです。今回の基調講演は石巻専修大学の坂田学長にご依頼いたしました。私が坂田学長と初めてお会いしたのは、2011年の11月27日、宮城学院女子大学で行われた社会福祉士養成校協会東北ブロック研修会の場でした。このブロック研修会企画委員会において、石巻専修大学の坂田学長の話が聞きたいと提案したのは私です。

被災地であって、いわゆる震災に対応しながら、なおかつ復興に向けて奮闘している大学、その学長の話を知りたいという思いがあったからです。震災当時、私は本学の学生部長であり、私自身もまた、小さな大学ではありますが、震災直後の学生対応に奔走した経験があります。そんな思いが重なって、坂田学長の話を知りたいと申し出て、それが研修会で実現したという経緯がありました。

そのとき、坂田学長のお話を拝聴いたしまして、「石巻専修大学の覚悟」このことが非常に印象に残りました。たしか復興には最低10年かかる。その10年のなかで何をやるかということを考えていきたいということを凛として私たちに語ってくださったことを鮮明に覚えています。

今大会においても、被災地にある大学として、どんな思いで震災と向き合い、大学を支え、地域社会と連携してきたか。この点を基調講演として坂田先生にお話しいただきたいということでお願いいたしました。今朝ほど石巻を出て、先ほど本学にお着きになりました。ご講演の主旨として、

①東日本大震災の対応と復興。それから、②被災地にある大学の使命と課題、そして③地域社会の連携についてということをお願いいたしました。迫力のある話がうかがえるものと期待しております。

3. ふたつのシンポジウムへの期待

(1) 学会企画シンポジウムへの期待

さて、3つ目の話はふたつのシンポジウムへの期待です。そのひとつである学会企画シンポジウムについては、今日の午後、災害ソーシャルワークに関する理論化の問題が取り上げられます。その視点として、シンポジウム趣旨のなかで3点が挙げられています。ひとつは、災害支援を災害発生から復興支援までの時間軸で考える視点、そして2つ目は、これらを、マイクロ・メゾ・マクロといった展開規模でとらえる視点、そして3つ目は、ターゲットとして、大震災から小規模災害までを視野に入れると、こうした点を踏まえた議論がなされるものと期待しています。

このシンポジウムに対しまして、大変僭越ではありますが、大会長の立場から2つの要望といたしますか、検討課題を提示させていただきます。ひとつは、既存のソーシャルワークと災害ソーシャルワークの位置関係について、ぜひご検討いただきたいということです。それと関連して、災害ソーシャルワークの特殊性がどこにあるのか、日常的なソーシャルワークとの関係についてご検討いただくことを期待しております。

今大会は実践現場の方たちが一定割合、参加しています。まさに3.11の大震災のあと、緊急対応からずっと長きに渡って、ソーシャルワーク実践をされている方々です。その方たちは、本日の災害ソーシャルワークの構想が、どのようなレベルでなされるのかということに関して、やはりそれなりの期待があるものと推察いたします。

災害ソーシャルワークの理論構築に関して、岩間伸之副会長と私たちがやっている、ソーシャルワークの機能特性に着目した研究がございます。科研に採択され、これから3年間取り組むことになりましたが、そのなかでは、災害対応事例の積

み重ねが、災害ソーシャルワークになるのではない。いろんなところで起きている災害対応事例を経験的に積み重ねていだけで災害ソーシャルワークと言えるのかという問題提起をしております。

ですから、その問題を紐解くためにも、既存のソーシャルワークと災害ソーシャルワークの位置関係、災害ソーシャルワークの特殊性はどこにあるのかということを含めていかなければならないと思います。また理論化に向けて、実際の災害ソーシャルワークとの切り結びをどのように考えるかという課題もあるように思います。

災害ソーシャルワークに関して、上野谷加代子先生が、2013 年 4 月の鉄道弘済会『社会福祉研究』に論文¹⁾を書かれております。そのなかで災害ソーシャルワークとは何かの議論の必要性があるという記述がございます。私、これを読んだとき、まさにその通りだと思ひまして、今回、引用させていただきました。「危機介入との関連に論じられたソーシャルワークと災害ソーシャルワークは何が違うのか」。危機介入との関連で論じられたソーシャルワークと災害ソーシャルワークは何が違うのか。これが第 1 点です。

それから第 2 点として「災害ソーシャルワークは、ジェネラリストソーシャルワークの位置関係をいかに論じるべきか、あるいは一般的実践概念としてのソーシャルワークにいかなる関連性を持つことになるのか」これが第 2 点です。それから第 3 点として、「災害ソーシャルワークが、固体論（高齢者、子ども等々）とは別の、実践現場の形態論（コミュニティ、施設等々）とも別の枠組みの中で論じられるべきものか」これが第 3 点です。

上野谷先生は、この 3 つのことを問題提起されております。先ほど私が申し上げましたように、災害ソーシャルワークの位置づけの問題、理論構築における既存のソーシャルワークの関係をどのように考えるのかという問題について、切れ味よく論点を提示していただいたのがこの論文だと思います。後ほどのシンポジウムにおいて、これらのことについて議論していただくことを大会長として期待しております。以下が第 1 の検討課題で

す。

さて、もうひとつの期待は、今回の災害ソーシャルワークの構想が、実際の災害ソーシャルワーク実践に対して、いかなる貢献をなすのか。先ほど申し上げましたように、今大会は実践現場の方たちが随分いらしています。その方たちが実際に災害ソーシャルワークの実践を行ううえで、シンポジウムで議論される「災害ソーシャルワークの構想」はいかなる有効性を持つのか。さらに今後、各地で起こることが予想されるさまざまな災害において、有効な災害ソーシャルワークとはどのようなものかという点について、ぜひご議論いただきたいと思ひます。これが第 2 の検討課題です。

日本ソーシャルワーク学会が、災害ソーシャルワークの問題に、真正面から取り組むわけですので、そこにはそれなりの期待と私たちの見識が問われている。そのように考えております。

(2) 大会校企画シンポジウムへの期待

さてもうひとつ、今大会では大会校企画シンポジウムを組ませていただきました。これに関しましては、私自身がコーディネーターを務めますので、自分が自分自身に期待するという言い方はおかしいのですが、一応このような趣旨で、このシンポジウムを組んだということをお話させていただきます。

プログラム抄録集の 63 ページをご覧ください。ここに、明日の午後の大会校企画シンポジウムの趣旨、進め方、これに関連する資料を載せています。趣旨に関しましては、スライドのほうを読みますけれども、「日本社会福祉教育学校連盟・社会福祉専門教育委員会が長年取り組んできたコア・カリキュラム構想について、ソーシャルワーク研究と教育と実践の立場から、総合的な検討を行うことが目的です。私自身、学校連盟の社会福祉専門委員会の委員を長年務めさせていただきましたが、学校連盟はたしか 8 年ぐらいこの問題に取り組んできた歴史がございます。

シンポジウムの目的を 3 つ設定しました。まず、ソーシャルワーク研究の立場からソーシャルワーク研究の水準と「コア・カリキュラム構想」

とを照合する。ソーシャルワーク研究のレベルとコア・カリキュラム構想が、どのような位置関係にあるのか、この問題を詰めたと思います。

それから2点目は、ソーシャルワーク教育の立場から、福祉専門職養成教育としてのコア・カリキュラム構想の評価、それと中教審の答申以来、いろんところで議論されておりますけれども、教育方法のあり方について検討する。第1点目がソーシャルワーク研究であれば、2点目はソーシャルワーク教育との関係性です。

そしてもうひとつ、3点目は、ソーシャルワーク実践の立場から、ソーシャルワーク実践領域における実践水準と、「コア・カリキュラム構想」の位置関係について検討する。この3点を検討することがこのシンポジウムの目的です。

以下、具体的な検討課題を整理しますと、検討課題①は、コア・カリキュラム構想の成果と課題について確認を行いたい。それから検討課題②は、コア・カリキュラム構想に関する総合的な検討、ソーシャルワーク研究と教育と実践の立場から、その検討が必要である。そして検討課題③は、「コア・カリキュラム構想」と関連して、ソーシャルワーク実践水準と教育水準について考察する、この3点です。

プログラム抄録集 64～65 ページに、学校連盟がまとめた『平成 24 年度 社会福祉振興・試験センター助成事業 社会福祉の質の向上に資するカリキュラムに関する研究』報告書の一部を抜粋させていただきました。その部分は、簡単にご説明いたしますと、コア・カリキュラム構想は4期に分かれて取り組まれており、第1期 2003 年～2006 年、第2期 2006 年～2008 年、第3期 2008 年～2009 年、そして第4期 2009 年～2012 年3月までです。その成果として現時点の「コア・カリキュラムVI 群 18 項目」を載せておきました。

これまで、いろんところでこのコア・カリキュラム構想については、発表してきたつもりな

のですが、個人的な感触として、「コア・カリキュラム構想」については議論されてこなかったようです。

ですから、この30回大会の大会校企画として、この問題を取り上げたいと考えました。先ほどご紹介した3つの課題に、明日のシンポジウムでどこまで掘り下げることができるのか。この点を大会校企画シンポジウムへの期待として、まとめさせていただきます。

おわりに

以上が、私が学会長挨拶として用意させていただいた話です。ひとつは、仙台でやることの意義を、大会校自身がしっかり受け止めて、その準備をしたいということ。2つ目に、そのためにいくつかのプログラムの内容についてお話しさせていただきました。それから3つ目に、ふたつのシンポジウムに関して、それぞれへの期待を述べさせていただきます。

本大会が、東日本大震災の被災地で行えることの意義を踏まえ、学会企画シンポジウムと大会企画シンポジウムが共に構想というものに挑むわけですから、その成果を期待したいと思います。

このような基調講演やシンポジウムを通して、本大会がソーシャルワーク実践および理論レベルの向上に寄与することを期待したいと思います。そして最後に、本大会が会員の皆さんの多くの学びとなることを心より祈念いたしまして、大会長挨拶とさせていただきます。ご清聴ありがとうございます。

注

- 1) 上野谷加代子 (2013) 『東日本大震災を風化させないために—10年後を視野に入れた社会福祉の研究手法への提言—』社会福祉研究 第116号、鉄道弘済会、p.30.